

幻想世界魔物大全5

サキュバスⅢ

表紙イラスト セイヘキマスター

編集・発行 白森書房



レッサーササキユバス

レッサーサキュバス

危険度…C

出現場所…様々

知能…普通

特殊能力…様々

サキュバスの中でも特に人間から変異して間もない、幼い個体を指す。

彼女たちは人間の女性がサキュバスに捕まり、魔力を受け入れたり、何らかの契約を果たす事で生み出される。と言っても誘い一つで魔族への変貌を受け入れる人間は少ないため、彼女らの大半は凄惨なまでの快樂調教を受けている。

上位のサキュバスともなると男性のみならず女性からも精気を吸収できる個体が存在し、その淫猥な手管と魔力には禁欲を主義とする聖職者の類であろうとも決して逆らう事はできない。狂うほどの快樂で人としての論理観を壊されるか、はたまた心が折れるまで焦らされ続けて屈服を強いられるか……ともかく強烈な性体験を与えられ、それがレッサーサキュバスの根幹となる。

その体には魔族の証である翼や尻尾が生え、また肌や体つきは自然と肉感的に、有り

体に言えば色気を纏うようになる。だがそれ以上に大きな変化は見られず、一見しただけで彼女たちの変異を見抜くのは困難である。

まだ無条件に異性を誑かす能力の無いレッサーは、その多くが手始めに身近な人間を標的とする。親しさを道具にして人気の無い所に誘い込み、罠にかけて身動きを取れなくしてしまう。そうして、自身が調教されて得た経験と本能に従って、淫魔としての初めての食事……搾精に取り組むのである。

魔族への変化を受け入れた時点で人間としての道徳は大抵失われており、普段と同じ人柄を保っているように見えても、その実は経験を活かした擬態をしているに過ぎない。友人に恋人、親子や兄弟すら彼女らにとっては異性である限り「餌」である。

もし、身近な女性が急に魅力的に見え始めたり、しつこく人気の無い場所に誘ってくるようになったら——こっそり背筋や腰元に触れ、そこにあるはずのない物についていないか確かめた方がいい。

そして、もしもその人が「人」でなくなってしまうていたならば、直ちにその場を去って、魔物狩りの専門を頼ることだ。それこそ、人であった頃の彼女に対する最大の優しさと鎮魂になるのだから。



朱に交われば
朱に淫れる

文 網 ネット
挿絵 雪



幻想世界魔物大全

登場人物紹介

アレク

壮年の冒険者。

口数は少ないが実直で情には熱く、冒険者の宿に飛び込んできた二人の駆け出しを保護し、面倒を見てきた。

その彼女達と急に連絡が取れなくなり、気を揉む彼は、ようやく安堵の再開を果たしたのだが……

シャロン

口を開けばアレクをからかう、天真爛漫な少女戦士。

子供らしさの残る言動や背丈の割にグラマラス。

リリーナ

寝る時でさえ魔法書を手放さない、寡黙な少女魔術師。

街中では常に二人の後ろに隠れているが、小さな体には底知れぬ魔力と叡智を秘めている。

朱に交われば朱に淫れる

――

酒場『グレイト・エッジズ』。巨大な木材を剣の形に削り出し、でかでかと店名を書き記した看板が目を引く、大酒場である。多大な功績を残した高名な冒険者が引退後に開いたというこの店は、開店から一世紀以上が経った現在でも多くの冒険者が集う。

ある者は情報を求め、ある者は仕事を求め……酒と食事を嗜みながらも油断なく目を光らせる。大抵の冒険者が食事中も武器を降ろさなばかりか、威圧の如く抜き身の刃物をちらつかせる者もいる。

そんな店を独りで訪れる者は少ない。誰にも邪魔されずに静かな食事がしたいなら、もっと適した場所はいくらでもある。何より、刺々しいまでの喧騒は独り身に厳しく突き刺さるのだ。

もし一人きりの人間がいるとすれば、その孤独を解決するために仲間を見繕っているか、あるいは既に仲間を持っており待ち合わせをしているかのいずれか。酒場の片隅、壁際の席にどかりと腰を下ろしている男……アレクはしばらく前まで前者であり、今は

後者だった。

彼は絞るように鍛え上げられた恵体に鎖かたびらを纏い、背中には無骨な中盾を背負う壮年の男だ。テーブルの反対側には二脚の椅子を埋める形で、柄がくたびれるほど使い込まれた直剣が横たえられている。

精悍な眼差しはいかにもストイックな性分を示しており、その裏付けの如く、大きなジョッキに注がれているのは単なる氷水だ。既に空となった皿も体格に反して小さく、贅沢をしている様子は皆無。

静かで独特な雰囲気は彼のいる一席を埋めており、時に通りがかりの同業者から注目され、また爪弾きにされを繰り返していた。酒場の愉快な雰囲気を多少曇らせるからといって、わざわざ絡む必要性は誰にもない。

と、アレクが日課である食後の黙祷を終え、閉じていた目を開けた。視界を塞いだまま、喧騒の中からせわしない早歩きと引きずられるようについてくる足音を聞き取ったのだ。彼は少し前からその音を探していた。

「ごつめーん！ アレクおじさん、待った？」

アレクが何か言うよりも先に、足音の主の片方が空いていた椅子に腰掛けた。アレク

の得物を簡単なクッション代わりにして。……何というずばらな行為だろうか。剣士の命である武器を尻に敷こうとは。

しかし、これはアレクにとっていつもの事なのだった。何度注意しても直らない。というより、注意されるのを期待している節がある。まるで構ってほしがりのいたずらっ子だ。

「おじさんはやめてくれ。……待ったには待ったが、腹ごしらえ程度だ。気にしないでくれ、シャロン」

「ならよかったー。三度寝してきてもよかったかなあ」

「……おい」

「えへへっ。冗談だよー」

彼女の名はシャロン。歴とした大人の冒険者だが、背伸びした子供にしか見えない風貌が特徴だ。くしし、と楽しげに笑う童顔も、アレクより頭一つ小さい背丈も。やんちゃに緩めた革のベルトやだらしく羽織っている上着も。さっぱりと涼しげに切りそろえられた金髪も。全て、彼女を実年齢より幼く見せる。

ただ一点、彼女を成熟した女性だと思わせるのは体格に見合わぬプロポーション。身

軽さを重視した格好だけに、出るべき所が出て引つ込むべき所が引つ込んでいる、世の女性が目指すような体型がくつきりと見て取れる。その中でも特に胸元の主張は激しく、シャツにかかったボタンは下から押し上げられて今にもはちきれそうだ。

「私もなにか頼んでいい？ 急いできたからお腹空いちゃったよ」

「自分で払うならいいぞ。食べ終わるまでは待ってやる」

「自腹？ じゃあやーめたつと」

「……おい……」

そもそも遅れて来ておいてなんという態度だ、と流石に言い咎めようとした所で、シヤロンのすぐ背後から握り拳が軽く振り下ろされる。ぱかん、と頭頂部を軽く一打した。もう一人、シヤロンに連れられてきた冒険者……シヤロンよりも幼い少女の仕業である。

「あいたつ。もー。冗談だよ、冗談」

「……やあ、リリーナ。ありがとう、調子はどうだ？」

「……………」

軽めのげんこつを食らわせた少女、リリーナはうんともすんとも言わない。アレクの

方をちらりとだけ見て、会話を拒むかのように頭へ乗せたとんがり帽子を目深に被り直した。

シャロンが子供っぽい中にアンバランスな肢体を持っている女性だとすれば、リリーナは真正正銘の子供だ。帽子の下に見えた顔立ちからして幼く、黒衣から伸びた痩せぎすの手は色白い。露出の少ない格好に加えて上から下まで黒ずくめ……見るからに「魔女の卵」といった所だ。

——この二人こそ、アレクが自分に厳しくすべしというポリシーを捨ててまで協力関係を結んだ、冒険者のコンビである。身軽で軽薄なシーフと、無口で幼い魔女。

「ところでさ、アレクさん。一人で居て大丈夫だった？」

「大丈夫……？ なんのことだ？」

「今日ね。詐欺とかスリ目的の人多いよ、ここ」

思いがけない言葉に、アレクはシャロンをまっすぐ見つめて瞬きを繰り返す。へらへらと冗談めいていた笑みは消え去っていた。どこにも焦点が合わない澄み渡った目つきで顔を伏せ、聴覚に意識を集中させているようである。

自分たちの会話すら通じづらい、滝壺もかくやという騒ぎから何を聞き取っているの



か。アレクのように聞き慣れた足音を待ち続けるのとは訳が違う。そもそも、その気配とは耳を使って聞き取れるものなのかどうか。

「……根拠は？」

「勘。ここ自体が鉄火場だと思ってる人がそこそこいる。タダで利益を出そうとしてる汚いやり方の臭いがする」

根拠、と呼ぶには曖昧すぎる答えが返される。まさしく彼女にしか分からない直感の話だ。

だがアレクは知っていた。このシャロンは、“勘”を決して外さない。天候、災害、事故、奇襲……彼女は一度の冒険の内に、両手では数え切れないほど予測を的中させるのだ。

ただの冒険者仲間であるアレクは彼女の生い立ちなど知らない。その超人的な分析能力がどこに由来する物なのか興味は尽きなかった。

「問題ないさ。俺がケチな文句やスリに引っかかると思うか？」

「真面目な人ほど引っかかりやすいって言うし。気をつけるに越したことないと思うなあ……ね、リリーナちゃん」

「なら、吹き飛ばす？」

どしんと重たい振動がテーブルを揺らす。落ちかかった皿を慌てて手に取り、アレクはいつの間にかやら側に回り込んでいたリリーナの方を見やった。

彼女が机の上に置いたのは、法律の全書にも匹敵しようかという分厚い書物。小脇に抱えなければならぬ厚さと重さに加え、開かれたページにびっしりと書き込まれた文字はあまりに小さい。一文字ずつ読もうと思ったなら虫眼鏡は欠かせないだろう。それが魔法使いリリーナの、唯一無二の武器だ。

「……ぜ、絶好調だねリリーナちゃん……」

「いや、そこまでしなくてもいい……お前に任せたら本当に吹き飛ばしてしまいそうだし……」

「そう」

開かれたばかりの魔法書と、記された魔法陣が閉じられる。両側から勢いよく閉じるだけで前髪が浮き上がるほどの風が起こった。

彼女にとって、その問いは冗談でもなんでもなかった。アレクもシャロンも、何度も見てきている。書を開き、何やら唱えるだけで、並みいる敵が蹂躪されるのを。炎を起

こし、大水を降り注がせ、雷を放つのを。

シャロンに同じく生い立ちは不詳、この歳でもう底が見えない実力の持ち主。冒険者としての才能はアレクより遙かに上かもしれない。

魔法書を大事そうに抱え直し、やっと椅子に座ったりリーナを見てアレクは不意に笑い声を上げてしまった。

この二人は過去、見てくれと性別で敬遠され、誰もパーティを組んでくれずこの酒場の隅で困り果てていたのだ。彼女らにアレクの方から声を掛けたのは、はつきり言って気まぐれだ。足を引っ張られるのは覚悟の上で、冒険者の道がいかに厳しいか教えてやろうとしたのである。

そして、彼は二人が共にダイヤの原石であるを知ったのだ。彼女らは確実に大成する。アレクよりも、この酒場に集う誰よりもだ。まだ未熟な彼女たちを埋もれさせたり、死なせてはならない。決して。

「アレクさん、ニヤニヤしてどうしたの？ 良い事でもあった？」

「はは……いいや、特に。気にするな。……さて、よく分からん連中が絡んでくる前に出発するか」

席を立ち、アレクは椅子の下に置いていた荷物を抱え込むついでにシャロンの尻に敷かれた剣の柄を掴む。片手でこの原理のように持ち上げると、細身のシャロンは面白いように上下へ揺らされた。

「ちよつ、きゃつ……ま、待ってよつ！ 私まだなんも食べてないって！」

「街を出る前に市場に寄ればいいじゃないか。軽いものなら奢ってもいいぞ」

「ほんと!? ならしゅっぱーつ！ シャロン冒険団の旅立ちだよ！」

「どうしてお前がリーダーのような扱いなんだ……」

ぼやくように突っ込みつつも、男は思うのだった。彼女が冗談めかして口にする冒険団はいずれ本物になる。今はまだ、隣のテーブルの荒くれ共が眉をひそめる程度の存在だが、きつとその名が知れ渡る日が来るだろう。

「……私も」

蚊の鳴くような声そのものは喧騒にかき消されたが、リリーナが背後にそっと隠れようとした気配はアレクも感じた。未来の大魔導師も、まだ心は子供。世話、と言うと悪く聞こえるかもしれないが——手厚く関わってやらなければ。

アレクはこの歳になって初めて、自分が強くなるよりも誰かを育てる方が向いている

のではないかと感じるようになった。彼女たちとの出会いと冒険が多くの変革をもたらしてくれたのだ。

正直なところ、感謝してもしきれないと彼は日々思っていた。照れ臭さゆえに面と向かつては言えないが……二人はアレクにとって、とても大切な人になりつつあったのだ。



その二人が消息を絶って、その日で二週間目となった。

正確に「消息を絶った」のだと判断したのは最後に会ってから一週間後のこと。シャロンの構って欲しがりな気質もあり、アレクは最低でも週に一度は彼女と会うか、連絡を送り合っていたのだ。時には狙い目の仕事情報などを添えて。

それが、無くなった。酒場の店員に割高なチップを握らせて尋ね、彼女たち行きつけの店で同じ事をして、行方が知れない。同時に、どこにも姿を見せていないとも知ってしまった。

冒険者が親しい人にも告げず失踪する訳は大きく分けて二つある。一つは伝える間もないほど緊急性や機密性が高い依頼を受けた場合だ。これはアレクにも経験がある。今

まさに隣街が魔物の群れから襲撃を受けているとの報を聞き、着の身着のまま向かったのだ。

彼女たちに関して、その可能性は低い。重大な依頼を受けるような性分ではないし、緊急を要する依頼ならば二週間も期間はかからない筈だ。この状況にそぐわない。

とすると、消去法でもう一つの理由が有力になってしまふのだ。……ヘマをして、命を落としたか。

「……クソッ……」

この数日で、アレクは自分自身に対して何度被りを振っていただろう。彼の中の冷静で理性的な部分は、もう認めている。だが感情的な部分が二人の無事を信じ、悪い想像を打ち消そうとしているのだ。

アレクと組む以前でも、二人が自分たちだけで簡単な仕事に取り組んでいるとは聞いていた。危険そうな仕事なら、必ずアレクを誘うからと念押しされて安心していた面もある。……その言葉を信じきって何も考えていなかった自分に、最後に別れた際に忠告の一つもしておかなかった自分に、腹が立って仕方がなかった。

アルコールを啣る代わりに、頭痛さえ催す温度の氷水を飲み干し、底から転がってき

た角氷を乱暴に噛み砕く。睡眠時間が日に日に削れているのも災いして、さながら飢えた獣のような姿だ。

黒々とした危機感が芽生えてからというもの満足な休みが取れていない。質実剛健な冒険者としての顔はどこやら、毎日鍛錬を欠かさずに鍛え上げてきた身体も、今は寂しげに縮こまっている。彼が剣を取って以来、初めて見せた姿と言っているだろうか。

——そのしょぼくれた背中を、背後から忍び寄ってひっぱたく者が一人。思いがけない衝撃に身を強ばらせ、アレクはすぐに背後を睨みつけた。抱え込んだきたやるせない怒りと悲しみが、そちらへ一方的に吐き出されようとした……が、寸前で止まる。

「よっすアレクさくん。元気だった？」

アレクが今この世で一番会いたく、しかしもう不可能かも知れないと覚悟していた人だった。

子供っぽい所作を見せる不思議な女性と、その後ろを静かについてくる暗い雰囲気のある少女。いつものように、ただ平然と戻ってきてくれればいいと願ってはいた。願ってはいたが、まさか本当にそうなるとは露ほども思っておらず、面食らった。

「シャロン……？　り、リリーナ……？」

「そうだよん。アレクおじさんの大好きな、美少女コンビのシャロンとリリ……」

「いっ……今までどこに行ってたんだ!? 何も言わないで、十日以上もだぞ!」

押し倒しかねない勢いで両肩を力強く掴み、詰め寄ってしまう。迫られた側のシャロンは押されるがまま後ずさりし、俯いたリリーナにまで正面衝突してしまった。喧嘩事かと期待した周囲から一旦視線が集まり、事情を察するや自分たちの会話に戻る。

奇妙な話だが、アレクは手の中に本物の温度を感じながらもまず疑った。これが現実なのかどうか。夢や幻覚ではないか。

瞬きを繰り返し、頭の上から足先まで観察し直して確認する。強く握れば折れてしまいそうなほどの細身。最後に会った時と同じ清潔な服装。「どうどう」と遠慮がちにアレクを押し戻しながら浮かべる困り顔。いずれも本物だ。

……その表情にじっと向き合っていると、アレクの胸はいやに高鳴った。久しぶりに会ったせいなのか、異性としての彼女を意識してしまうのだ。傷の絶えない冒険者とは思えないほど艶やかで綺麗な肌や、引く手数多であろう愛らしい童顔から段々と目が背けられなくなる。

「……ねーえ、アレクさん。実は、アレクさんに案内したい場所があるの。かなり珍し

いダンジョンなんだけど……」

「ダンジョン？　——今そんな事を言ってる場合か！　こっちが、一体どれだけ心配したと思ってるんだ！」

「ご、ごめんって……そう言わずにさ……」

噛みつかんばかりの剣幕で迫ってくる恵体の男には流石に威圧感がある。アレクと同じ大人の男でもたじろいでしまいそうな迫力だ。

背中の中にリリーナが引っ込んでいるせいで、シャロンは板挟みの状態だ。言葉を尽くしてアレクを宥めすかそうとしていたが、しばらくしてそれは難しそうだと思つたらしい。心の底から心配している相手に、冗談では鎮静剤になるまい。

肩を掴んだ手は怒りと安心が入り交じって微かに震えている。そこへ、シャロンは自らの指をやりわりと重ねた。忍び寄るようにして耳元へ口を寄せる。小さく背伸びをして、お互いの顔が見えないような体勢となった。

「お願い……とにかく、来て。来てくれたら、きっと事情も分かると思うから」
鈴を転がすような声が至近距離から耳の中へ注がれる。それと共に、アレクが感じたのは心地よく甘い香りだった。

何と言われたのか、理解が少し遅れる。シャロンはこんな、香水などをつけるようなタイプだっただろうか。草花の匂いやリリーナの扱う薬の臭いが混じり、女性らしい気配などとは無縁であつた筈なのに。

内心で無礼な考えを浮かべているのを見透かしたとでもいうのか、シャロンの身体越しに、じつとりと湿り気を帯びたりリーナの視線が突き刺さる。いつもの無感情な瞳だが、やはりどこか変わつてしまつた気がしてならない。より深く、心中をくすぐられるように。

「あ……ああ、分かつた……」

説教の言葉は無数に思いついたが、アレクはそれら全てを心の奥に押し込めて、頷いてしまった。頷かされてしまった、と言い換えても成立してしまうほど早計な判断である。

「じゃー行こ！ 支払いは済ませといたからさ！」

「な、いつの間に……うお、おい、引っ張るなつて」

頷くや否や、シャロンはぐいぐいと手を引いてアレクを店の出口へ誘う。その後ろでは、持つて行き損ねた荷物や剣をリリーナがそろりと抱え込んでいた。二人らしい役割

分担と、召使いじみた万全なサポート。周りから浴びせられる好奇の視線に溜息を吐きながらも、アレクの胸中にはまだ混乱があった。

安心して居る中になにか引かかる。二人がやけに、記憶していた以上に魅力的に見えること。……それに様子も違う。シャロンはいつもの数倍は強引で、リリーナは少ない口数が完全に絶無となっている。空白の期間が彼女らを変えてしまったのか？ 一月にも満たない時間で、生まれ持った性分まで？

ウェイトレスの礼を後目に店を飛び出し、アレクはどうかシャロンと足並みを揃える。シーフを自称するだけあって彼女の足は速い。手を繋いでいても、置いて行かれてしまいそうに感じる。

急かされて街を出るのかと思いきや、向かっている先は逆に街中のように。相応の用意を整えるためか……とアレクは考えるが、その想像も外れた。シャロンは大通りから急転換して、建物と建物の隙間に彼を連れ込んだのである。

そこにあるのは単なる路地裏。人の気配も変哲もない、ただの細い道に過ぎない。彼らに好奇を抱くものなど周りにはいなかったし、身を隠す必要もない筈である。まだ混乱から回復しきっていない頭を振って、アレクは問う。

「お、おい……なんだ、こっちでいいのか？」

「うん、いいの。もつと奥の方まで行くよー」

「奥……って言っても……」

黒ずんだ壁に左右を挟まれ、屋根の陰で日光も届かない道を、厭な閉塞感を覚えながらも先へ先へ。この辺りは鼠や野良犬の溜まり場にもなっているのか、壁際には時たま生ゴミが転がっている。そもそものが清潔な場所ではないが、それらがますます不快感を煽った。

——行き止まりと見せかけて、奥まで進まなければ見えない曲がり角がある。

——その逆に、住宅地のそれに似て曲がり道だらけの通路もある。

シャロンの足取りは何かを追いついて速く、アレクはついて行くのがやつとの状態だった。それに、もしこんな場所に独りで取り残されてしまったとしたら、帰り道などとても分からない。

街中にこのような人工の迷路があったとは、アレクは知らなかった。手を引かれていく先に、より細く、より目立たない道が何度も現れる。不安を覚えて背後を振り返ると、半分息を切らしながら走ってくるリリーナの姿が目に入った。……ほんの少しの違和感

を抱く。シャロンは強引でおてんばな冒険者ではあるが、最低限の気遣いも出来るような女性だ。リリーナに無理をさせるような速さで行動するのは、よほどの緊急時だけだったというのに。

ともかく彼女がついてこられるように、アレクは初めてシャロンの手を引き返しつつ尋ねる。

「そろそろ教えてくれないか……こんな所に何があるっていうんだ。ここもまあ、ダンジョンみたいな場所と言えなくはないが」

魔物がおらず、素材や宝も無く、近くに人が住むダンジョン。当然これはジョークの類だ。

「アレクさんのせっかち。……もうすぐだよ。あと一つ曲がったところ」

冷静な思考を維持しようとした筈が、思いがけず穏やかな微笑みを向けられ、彼は逆に顔を背けさせられてしまう。良い意味で直視し難い。やはり錯覚でも何でもなく、シャロンが一人の女性として魅力を増したのだろうか。

親愛の感情を向けられていると察してしまっているからこそ、アレクは意識せずにいられなかった。今までは、色恋沙汰に関わる感情とは無縁に生きてきたというのに。

だがこれ以上に問いを重ねる必要もなく、辿り着こうとはしているようだった。どこか特定の場所に向かっているとは信じられず、この変わらない景色の先にダンジョンと関わる「何か」があるとはますます信じられない話ではあるが。

抗えない。立ち止まれない。強くリードされている実感を得ながら、彼は終着点である路の前に立った。そこに何があったかというところ——行き止まりだ。

日当たりが悪く、昼間にも関わらず薄暗い空間に、何かの建物の裏側であろう灰色の壁が立ちはだかつている。

「あの壁。あそこに、『ポータル』があるの」

「……ポータル……タル？」

聞き慣れない単語を復唱しつつ、アレクは緩慢に歩く。未知の物体に対する警戒が芽生え、背負った盾を左手に持ち替えると、距離を測るようにじりじりと進んだ。

「別の場所に繋がる魔法の門のこと。あの壁がその入り口。あそこから先は、どこかのダンジョンだよ」

「……バカな。なんだってこんな所に、そんな摩訶不思議な物がある？」

「まあ、見ててよ」

臆面もなく疑いを露わにし始めたアレクを追い越し、シャロンは柔らかく笑む。やつのことでアレクから離れた手に、いつ拾ったのか手頃な大きさの石ころが乗っている。彼女はそれを、正面に向かって軽やかに放り投げた。

するべきだった衝突音は聞こえず、跳ね返って転がるはずがそこには落ちず。石ころは、音もなく壁の「向こう側」へと消えた。

「……!?」

「ほらね。私たちでも同じ事が起きるよ。この先は、もうダンジョン……といっても危ない魔物なんかは全然いなかったけどねー」

「……信じられん。ずっとここにあったのか？ それとも最近できたのか？」

「多分だけど、最近じゃないかなあ。今まで普通に生活してて気配を感じない物だったから……と言っても、場所を探り当てたのはリリーナちゃんなんだけどさ」

よどみなく説明するシャロン。アレクの背後で、こくこくと頷いているリリーナ。そこでまた一つ、アレクの中に疑問が生まれる。……リリーナの方が魔法の専門家であるのに、なぜシャロンの方が説明しているのか、不思議なのだ。二人の役割分担から反している。

あと二歩ほど、もう手を伸ばせば壁に届く所まで来てしまったため、聞く機会は逃してしまった。多くの違和感と疑問を押し込め、アレクは頭を仕事に切り替えて目を細める。

間近まで来ても、やはりただの壁にしか見えない……しかし『ポータル』は確かに存在する。じつとその中心を睨みつけて、彼はまたシャロンに問うた。

「つまり、しばらく連絡が途絶えたのはこの中を探索していたせいか……。底が見えないような深さなのか？」

「実はね、ちゃんと調べるのはまだなんだ。どっちかと言うと探索そのものよりも戻ってくる方法を作るのに時間を食っちゃって。一方通行だったからさ」

さらりと恐ろしいことを口にする、少女は肩をすくめる。……大きな苦労があったのだろうと、すぐに察しはついた。最終的には、きつとりリーナの魔法が物を言って無事に帰ってこられたに違いない。むしろそうでなければ、世界のどこにあるとも知れない謎のダンジョンへ一方的に放り込まれて、二週間程度で帰ってこられる筈が無い。最悪の場合、アレクが想像してしまった通り、永久に行方知れずだ。

改めて彼女たちが無事でいる現実には安堵を深め、アレクは盾の持ち手を強く握りしめ

る。もう二度とあんな油断はするまい。しっかりと連絡を取り合い、どこへ行こうと守り通せるように努めなければ。

「分かった……リリーナ、剣をよこしてくれ。俺はいつでもいいぞ」

「……………」

「あはは、急にすごいやる気だね。信じてくれて嬉しい。……でもさっきも言ったけど、入ってすぐには魔物なんていないと思うよ」

シャロンがやや驚いた顔でそう言うが、アレクは気にも留めなかった。つい数時間前まで体調は良くなかったが、今は武者震いさえしている。リリーナがおずおずと差し出してきた剣を手に取り、握りしめてその震えを抑え込む。

前人未踏の地、という言葉には一冒険者としても心が躍るのだ。ここで大きな成果を挙げられたなら、それは二人の名を世に広める一步になるかもしれない——熱い希望が、心に蟠っていた疑いや混乱をも薪にして燃え上がる。

「……よし、行くか」

最後に一度だけ振り返り、二人の姿を再確認して、堂々と歩み出す。……一方通行の『ポータル』に身体を沈み込ませたその瞬間、シャロンの笑みが暗く陰った事には気づ

かずに。

『ポータル』から与えられる感触は石壁の見た目に反して温かく、緩慢な追い風のようになつて手足にまとわりつく。重たい空気に瞼をなぞられ、思わず目を瞑ったが、その違和感もすぐに通り過ぎた。

恐る恐る目を開けてみれば、予想に反して路地裏よりも明るい景色が広がる。洞穴の奥を思わせる涼しい温度と、苔むして古びた石の臭い。そして踏み込んだ両足には、ずっと待ち構えていたとでも言わんばかりに遠慮なく、薄青い粘液が絡みつく。

「……な……」

水溜まりがあるのか、或いは泉のような場所なのか——そう勘違いしている間に、ソレは膝までよじ登ってきた。

ただの水とは異なり、まるで何かの生き物のようだ——そう認識を改めている間に、ソレと同じ液体が周囲の地面からも湧き出し、アレクの足下に注ぎ込まれていく。両足を呑み込んだ塊の容積が徐々に増し、潮が満ちるのに似てせり上がってくる。

「……に？」

ソレが悪意を持って作られた罠ではないかと感じたその瞬間に、腰から下を完全に絡

め取った粘液塊が内向きへ凝縮される。密度が増せば、それは指を突き入れても弾かれるほどの弾力と、金属にも引けを取らない重さを生み出す。アレクの体幹は完全にそこへ固定されてしまっていた。

体勢を整えるどころか反応すらできなかったアレクの肌に、怖気の走るどろどろの感触が這う。布に染み、金属の継ぎ目をすり抜ける生きた液体に防具などまるで無意味だ。

「く……クソッ、離せっ!」

すぐさま、正面から迫ってきた触手状の液体に斬りつけるアレク。上体の重みを乗せた荒々しい一撃だが、切先は粘液の輪郭を僅かに歪めただけで受け止められる。それどころか蠢く液体は刃の側面にまで絡みついて、武器を手から剥ぎ取ろうと圧をかけてくるのだ。

物理的な攻撃が通じない。地面からだくと液体が注がれ続け、体積を増していく。その勢いは激しく、周囲から生えていた一本一本の触手という区別はすぐさま失われていった。

もはや一刻の猶予も無い。そう悟った直後、アレクはすぐ背後に人の気配を感じた。シャロンとリリーナの二人が『ポータル』を潜って来てくれたのだろう。

この液体が自分に集中している内なら二人が隙を突ける。有効なのは物理攻撃よりも魔法か。彼女らの力を信じ、アレクはすぐさま助けを求めた。

「リリーナッ！ こいつを――」

俺ごとで良い、倒してくれ。そう言おうとして、できなかった。

二人は仲間の危機を眺めながら、ただ立っていた。……本当はアレクが液体に足を突っ込んだ時点でこちら側には来ていた。そう思わせるほど間近で、平然と。慌てる素振りも見せず。

アレクの声が詰まり、ごぼごぼと不気味に膨らみ続ける粘液塊の存在感ばかりが増す。力が抜け、剣と盾は無機質な粘液に奪われて地面に放り捨てられる。

「……ごめんね。アレクさん、ほんとにごめん」

「……………何を。……言ってる？」

「たくさん嘘ついちゃったから。……あはは、本当の事の方が少ないかも……」

なんだこれは。なんだそれは。どうして、何故、何のために。あらゆる疑問がアレクの口から飛び出そうとして、シャロンが浮かべた彼女らしくもない暗い笑みに押し留められていく。

考えている内も無理矢理な武装解除は進行していた。鎖たばらに膝当て、籠手、靴紐に至るまで何もかもが引き剥がされていた。皮膚を覆う不安定な水圧に隠され、彼はまだ自分が置かれている苦境の全容が見えていない。

アレクが上手に問いかけられなかったのと同様、二人はそれ以上に何も答えない。：無言でいる。その代わりに自分たちの服へと手をかけた。

武器も持ち物も、アレクがそうされているように地面へ落とされる。お気に入りの装備だと、魔法使いの証なのだと大事そうにしていた品々が。誇りも一緒に捨て去ったかの如く、ゆっくりと肌を晒す彼女たちに恥じらいの色は無い。

こんなにも危機的な状況だというのに、見知った少女たちが行う脱衣には、色街のストリップショーもかくやという異様な色気があった。アレクは自分を諷めるのすら忘れてしまっていた。制止したり、せめて目を逸らすべきであるのに出来ない。釘付けの状態だ。

こんなにも艶めかしい肢体をしていたのかと驚く。普段は見えないような、すらりとした脚や胸元まで——とうとう二人が、下着以外の衣服を全て、着直すつもりもないかのようにばらばらと足元に捨ててしまった。

その瞬間、アレクの中に生まれていた浅ましい感情が純粋な驚きへと変わる。

二人が身につけているのは、まるで高級な娼婦が自分を飾る時に使うような下着……いや、それを衣料と表現して良いものか。胸と秘部をかううじて隠す程度の、それは当て布だ。いずれも布地は漆黒に染まっている。その縁は不自然に刺々しく、彼女たち自身に爪を立てている。

目を離せない。自分で隠してほしい、とさえ願う。アレクのそんな思いには応えず、二人の背中から艶やかな膜を持つ翼がゆらりと広がった。蝙蝠と鳥を足し合わせ、人間の大きさに揃えたような歪な羽。

服の裾から垂れないように隠していたのだろうか。先端がハートの形に膨らんだ尻尾が、巻き付いていた太ももからゆくりほどける。ふらふらと左右に揺れる様子はいやに妖しく、本物の神経が通っているのを窺わせた。

……こんな事が。これでは、まるで彼女たちが。

「ま……もの……？」

「魔族、って言うてよ。一応、ちゃんとした……サキュバスなんだよ？」

金槌で思い切り頭を殴打されたような心地だった。重たい痺れがアレクの脳裏に染み

入る。

錯覚ではなかったのだ。いつもより愛しく、美しく思えたのも。こちらの心を揺らし、言われるがままにする色気を発していたのも。

彼女たちは魔族に身を墮とし、そして人が持つべきでない魔性を得ていたのだ。

それは冒険者が決して許すべきでない現象で、絶対に生かしてはおけない生物だ。禁忌と呼ぶに相応しい背徳だ。

「私たち……ここで、ご主人様に捕まって……誘われちゃったの……」

「……主人……だと」

「そう。すっごく偉いサキュバス様……子供を増やすのが趣味で、とっても優しくて、美しくて……」

両目の焦点が合わず、シャロンの瞳はうつとりと虚空を見つめている。豊満な胸の前で組まれた手に彼女自身の尾が愛おしげに絡む。不気味極まりない感情表現である。

「お……お前達は……ッ！ 魔物を、そんな風に……主人なんて呼ぶほどっ、墮ちてしまったのか……！ 何でだ……一体どうしてっ……！」

吐露された正直な感情は、怒りや失望よりも“悔しさ”に寄っていた。

魔族への変質は、人が人に対してできる最大の裏切りだ。子供でも本能で忌避するほど当然のタブーなのだ。それなのに、よりにもよって彼女たちが……彼が唯一将来を期待した冒険者仲間が。そのおぞましい誘いを受け入れてしまった、などと。

「……ごめんね。でもね、仕方なかったんだよ？」

口で謝られたとて許せる道理が無い。アレクは液塊から足を引き抜こうと何度も試みる。しかし、魔力を含んでいるのであろう悪意で満ちた罠に対し、単純な臂力による抵抗は無効も同然。体を回され、彼女たちと正面から向き合うように強いられても抵抗一つできなかった。

「し、シャロン……これ、これっ」

アレクの視界の端で、物陰にしゃがみ込んでいたりリーナがいつの間にか黒い革袋を手にしていた。

全容を見る余裕はなかったが、『ポータル』を経て転移してきた空間はどこぞの鍾乳洞のような場所。何かを隠しておけそうな場所は無数にある。この状況を想定していたというならば、二人が何を用意していても不思議ではない。

その上にアレクの心へ影を落としたのは、今にも泣き出しそうに上擦って震えた声だ

った。例えば、リリーナの声を聞いたのは二週間の空白から再会して初めてだ。冷徹かつ平坦な印象は遠く消え、我慢の限界を訴えるような焦りで満ちた声色である。

「良い子だね……ありがと、リリーナちゃん。じゃあ……早速、始めちゃうね」

革袋の口が開かれると共に、ブヨブヨの粘液塊が形を変える。凍り付いたかの如く固まり、表面のみでアレクの身を固定した。そこから縦に伸び、彼を地面から引き離すと同時に上半身を寝かせる——安楽椅子に腰掛けさせるような体勢だ。

アレクの視線は自然と自身の下半身へ移り、もはやそこを守っているのは薄い肌着のみであると今更気付く。丸腰の不安と恥辱が怒りに水を差す。

「くそおつ、離せ……！俺をどうする気だっ！」

「ナニするの catt？ サキュバスが男の人にするコトなんて、一つしか無いじゃない……」

“淫”らな“魔”族と書いて、淫魔。翼と尾さえ隠せば人間と区別がつかない幼体であれど、その本質は同じ。

理解したアレクが背筋を凍らせるのと、歩み寄ってきたシャロンがスライム状の椅子に触れるのが同時だった。どろりとして分厚いプールの中に細い芯が生まれ、下着のゴ

ムにひっかかり……もう一言制止する間もなく、それをずり下ろしてしまう。

「……わぁ……」

「み……見るなっ……!」

最悪なのは、最も恥ずべき部分を見られてしまった事そのものではなかった。彼女らの色気によって否応なしに反応してしまい、そこが直角の手前まで反り立った半勃起状態であった事だ。

気持ちの悪い流体に拘束され、仲間の墮落に怒りを露わにしながらも、雄の部分だけは浅ましく欲情しているのだ。こんなにも情けない事実が他にあるだろうか。

アレクは舌を噛み切ってしまいたいほど強い自罰の念に駆られていたが、それを見る二人はというと嘲るでも罵るでもなく目を輝かせている。彼女らは、もう人間らしい性観念など持ち合わせていないのだ。

「はぁぁぁ……お、おいしそう……いいにおい……うふっ、うふふふ……」

地面に両膝をついてまで顔を近づけ、リリーナが食い入るように股間を凝視している。……笑っていた。

彼女が笑っているのをアレクはここで初めて見た。今まで、ずっと見てみたいと思っ

ていたのだ。一緒に過ごしている内にいつかは見られるだろうと信じていた。

しかし、こんな形で。こんなにもどろどろにふやけ、魔族としての欲求に溺れた笑顔などは見たくなかった。いつそ別人であってくれたらどんなに良いか。

「私たち、ここでご主人様に沢山……愛してもらったの。最初は武器なんて向けた私たちに、優しく、魔性の快楽を教えてくださいませんか？　だから私たちも、アレクさんにいっぱいいっぱいおしえてあげる……」

袋の口から不穏な品が取り出されているのが見えた。水晶のような素材で作られた瓶と、その中で妖しげに泡を浮かせる液体。毒々しい紫色をした指輪のようなモノ。それに、用途の想像もつかないガラス筒じみた物体。

きつとそれらは、淫魔が扱うという人を誑かす為だけの道具だろう。快楽を強制するおぞましい品々に違いはない。

「よせ……。頼む、シャロン、リリーナ……正気に戻ってくれ……!」

「正気だよ？　ちよつとだけ、他の人たちよりも素敵なコトを知っちゃっただけ。はいリリーナちゃん、手、出して」

シャロンが両手に水晶の瓶を持ち、他の道具は細長い尻尾が器用に絡みついてすぐ手

元に控えさせる。もう既に、尻尾を三本目の手として扱えるようになっていた。冒険者として誇るべき呑み込みの早さが、今は悪しき方向に働いていた。

瓶の蓋が開かれるや、ゆらりと薄桃色の煙が上がる。リリーナが受け皿のような形にした手の上に、その液体はとぷり、とぷりと一塊ずつ落とされていく。粘度は蜂蜜などと同程度。アレクの身にまわりつくスライムよりは柔らかいように思えた。

飲ませるのでないならば、液体状の薬の用法は一つだけだ。身をよじって避けようとしたのも虚しく、たつぷりと薬液を乗せた両掌がアレクの胸元に密着する。

「う……くあっ!？」

見た目の通り、一度触れてしまうとべた付いて取れなくなってしまうようなそれが、ぬちゃぬちゃと塗り広げられる。リリーナの体温が移ったわけでもないだろうに、液体は生き物の体内から絞り出したばかりのように温かい。

そして「温かい」と感じた場所は、僅か数秒後に「熱い」感覚を芽生えさせる。肌が内側から炙られているかのようにヒリつき、段々とむず痒さを発していくのだ。

ダマや気泡を指で押し潰しながら、器用に動く細指が腹へ胸へ滑る。粘性の強い液体越しであるというのに、マッサージのように繊細な力加減や爪の先の鋭さすら感じられ

てしまう。痒みで疼く箇所になんか引つかかるたび、甘い電流のような感覚が走る。

「うあつ……り、リリーナ……やめろお……っ」

「……や……♪」

「不安がらなくてもいいんだよ？　それはね、ご主人様が自分の魔力を込めて精製した媚薬……気持ちいい、って感じる神経を増やしたり、元々ある神経を敏感にする効果があるんだって……」

シャロンもすぐ傍までやってくると、リリーナと取り合いでもするかのように媚薬液を広げていった。筋肉の丸みやへこみ、その溝の部分まで余さず、指が密着してはスムーズに滑る。ナメクジが這うような速度で、じつくりと。

質の悪い事に、彼を拘束する粘液の罫は防護服の代わりを果たしてくれなかった。彼女らの指先が近づくと青い粘液は静かに退き、指が離れるとまた覆い被さってくるのだ。くすぐったさが五割、ぬるい快感が五割の奇妙な感覚に声を漏らしてしまう。……抑えようとして抑えられるものではなかった。今まで、快楽を得るための部位として考えもしなかった箇所が熱く火照らされ、撫でられ引つかかれて性感帯へと改造されるのだ。魔力とやらを最大限に悪用したとは思えない、これは立派な責め苦だった。

「私たちもねえ、最初はこれをしてもらったの。ご主人様の手で、体中に満遍なく素敵なお薬を擦り込んでもらって……一杯いじって……」

「くう……ふっ……うぐう……!」

「ねえ、分かるでしょ？ 全身どこでも気持ちよくなれる、どこでもイけるようになるの……すっごく幸せなんだよ？ 何しても気持ちいいの……今もね、アレクさんの体に触ってる手のひらがゾクゾクしてたまんないの……」

聞きたくなどなかったが、耳を塞ぐのも許されず教えられてしまう。形はそのままに、感覚と神経だけを貶める薬効。それは冗談のような話だが紛れもなく真実なのだろう。彼女らの指がなぞっていった跡は、じくじくと熱い疼きを発している。

アレクは禁欲主義的な人間であり、今までは自分の三大欲求に対して厳しく向き合ってきた。しかし、内側から体の作りを変えてしまう誘惑にどう抵抗すればいいのか、その答えは見当も付かなかった。

「リリーナちゃん。……せえ……の」

「せえの……うひひ……」

子供の遊戯を思わせる調子で声を合わせ、二人は一緒に、アレクの肩から二の腕まで

を両手で扱き下ろした。自分たちの掌をスポンジ代わりに、汗ばんだ体を磨き洗うような愛撫……しかし、むしろ彼の体は淫魔の媚薬によって汚れていく。

「くおっ……ああ……」

敏感さとは程遠い場所であるというのに、勢いをつけて媚液で擦られるだけで多幸感が芽生える。粘液罌が腕から剥がれた好機を、彼は心地よさのあまり不意にしてしまった。その事実には気が付きすらない。むしろ粘液が再び腕をコーティングし、二人の指先が触れなくなった事の方に安堵してしまう。

手首まで達したそれぞれの手が、今度は別々の指先をきゅっと握ってくる。気ままなリズムで、ここにも扱き動きを与え始めた。

二人が手で作った輪が、アレクの指のいずれかへランダムに被さり、甘い毒で浸す。段々と鋭敏になっていく皮膚は、彼女たちとの歪な握手を楽しみだしていた。お互いの指と指の間、指関節に指の甲、時たま恋人繋ぎの形で絡み合う肌と肌が濡れた音階を生む。握りしめて動きを止めさせる力も、愛撫を振り払う力も、既にアレクの手には残っていないかった。

「さあ……次は……」

ねっとりとしつこい擦り込みを終えると、何本も細い糸を引きながら指が離れる。だが延々と味わわされた甘い手慰みは神経に残ったままであり、再び液体に沈められていきながらも腕が恍惚に震える。

次など無い、もうやめろ……アレクはそう言いかけたところで息を吞んでしまった。ただただいやらしく、悪意まで混じった笑みが、下半身へ。股間へ向けられていたからだ。性的な興奮を呼び起こす成分は肌から全身を巡り、彼の逸物は今や鉄のように固く反り返っている。薄い白濁を滲ませて脈打つ男根は、見た目だけでも女性をその気にさせるほどの肉欲を思わせた。

わき腹の辺りから焦らすようにして、指先が迫ってくる。ぬらり、ひたりと媚薬の泡立ちを転がしつつ。

手や腕でさえじんじんと気持ちよくなり続けているのに、もしそこを触られてしまったら一体どうなってしまうのか……撫でられ、握られ、擦り立てられてしまったら……きつと、逆らうことは困難だろう。

「……………こっち、だよ♪」

緩慢に陰茎へと迫りつつあった手は、しかし直前で進路を曲げて隆々とした太股へ着

地した。早くも炙られるような快樂が——男根にそれをされた時の想像に比べれば弱い、物足りない悦が染み出す。

「うっ……くう……」

「あれ？　もしかして、もう触ってほしかったの……？　お・ち・ん・ぽ♪」

「っ……だ、誰が……！」

「わたしは触りたいなあ……シャロン……さわりたいよお」

端的で淫らな誘いと、欲望に忠実な呟きが。肉感のみならず、艶やかな声質を伴って抵抗する氣力を奪う。

性欲の源泉とも言える箇所のご近くを、媚薬まみれの手が際どく蠢く。しかし徹底してペニスに触れようとはしない。これ見よがしに膨張して自己主張する陰囊にさえ、近づいたかと思えばすぐに内股の方へ滑っていつて粘液を塗り直すのだ。

“それ”をされると不味いことから、アレクにとっては喜ぶべきなのだ。二人の気まぐれな慈悲にすぎたままであるべきだ。……しかし、一思いに“それ”をしてほしい。気持ちには心の中で存在感を増す一方。快感を得られる面積が増えるごとに、ガチガチの肉竿が物欲しように真上を向いて震える。まるでその一カ所にも脳と同じ思考する器官

があり、全身に対して不満を訴えているかのようなだった。

「えへへ……そこは最後だよ。元から気持ちいい場所にこのお薬を塗ると、ちよつと触っただけでイっちゃうくらい……隅から隅まで気持ちよくなっちゃって、大変なんだから」

「ほんとうにすごいよ……アレク、きつとおかしくなっちゃうよ……」

「私たちもね、最初は今のアレクさんみたいに頑張つて抵抗してたんだよ？ でも、アソコの奥の奥までご主人様の細くて長い指でいじられて……いじめられて……えへっ、泣いちゃうくらいイカされちゃったの……」

陰惨と呼ぶに相応しい性拷問の過程をシャロンは嬉しそうに語る。リリーナは言葉を継ぎ足すことは出来ないものの、何度も頷いて彼女を肯定する。

アレクはまだ彼女たちのことをそこまで悪く言いたくはないと思っていた。が、しかしこの時ばかりは「狂っている」と口にせざるを得なかった。未だ残っている鋭い聴覚でそれを聞き取り、シャロンが不機嫌そうに眉を曲げる。

と、彼女がおもむろに立ち上がりアレクの背後へ回り込んだ。……ずぶん、と音を立ててアレクを拘束した粘液塊が少しずつ地面へ沈んでいく。彼の身は無様に大股を開い

たまま、二人の身長でも易々と見下ろされる高さまで降ろされてしまった。

首元まで拘束がせり上がっているせいで後ろが見られず、シャロンに何をされるのか予想が出来ない。無理矢理な興奮の中に一片だけ恐怖の色が混じった。が、側頭部をむにゅんと挟み込んだ幸せな圧迫感がそれを打ち消す。

「うおっ……!?」

「おかしくなんてないよ。魔族様に、ご主人様に教えてもらった幸せが本当に凄いだけ……。ずっと気持ちいいだけじゃなくて、こんな風に優しく包み込んでもらうと、溶けちゃいそうになるの……。私じゃちょっと物足りないかもしれないけど、アレクさんも分かってくれると嬉しいな」

両手でも抱え込めない大きさでいつも目立ち、すれ違う男性冒険者の視線を釘付けにしていた、あの魅惑の乳房だ。アレクの頭がその谷間に挟み込まれている。耳までもちもちの乳たぶが塞いでいるせいか、彼女に体を揺らされるたびに頭の奥までたぶん、たぷんと重たい振動が響く。

少し動き方を変えられるだけで甘い圧迫感が種類を変え、意志に反して熱い吐息をアレクから絞り出す。



淫靡なぬめりの残った両手がアレクの顎を舌なめずりにも似て撫で上げ、顔の向きをゆつくりと後ろに傾けさせる。そうすれば当然、頭を挟んでいた両乳は視界を一杯に埋め尽くす妖艶な迫力で彼を誘い——ごくりと唾を呑んだ直後に、顔全体を埋めさせてしまった。

手で支えず、ただ乗せて押しつけているだけでも頬や鼻へやわやわと密着してくる柔肉。その隙間で何とか息を吸い込むと、かぐわしい匂いが鼻孔から肺を満たし、恍惚に溺れさせる。体が近づいたときに感じた、あの“女性的”と称するのが適切な香りだ。それが更に深く、胸の間にたつぷり充満させた状態で吸い込まされているのだ。

「むっ、ぐ……ふっ!？」

傍目には、振り払うことなど何も難しくない状況に見えるだろう。だが雄の本能を鷲掴みにする感触と淫気の同時責めにあらがえる男など何処にもいないのだ。彼女の匂いで頭を一杯にし、悦楽に浸っている間は、全身の焦れたい快楽や射精欲で爆発しそうなペニスの事も忘れられる。

いや、ただ甘えるだけの時間を許してくれるような二人ではなかった。足先までを媚薬漬けにしていたリリーナの掌が、再び怒張の間近まで戻ってきていた。今度は右手の

人差し指だけが立てられ、その太さを測るかのようにくると刺激を焦らしている。なだらかに滑る指先が、いきり立って膨らんだ亀頭粘膜をほんの少しなぞってくれたら……掠めて、爪の先に溜めた媚薬液を落としてくれるだけでも、きつと腰砕けの快樂が得られるはずなのに。爆乳の深すぎる隙間に吐息を注ぎながら、彼は陰茎を跳ねさせた。ご褒美をねだる愛玩動物のような動きを無意識に強制させられている。

「うーんと……次は、ここでも気持ちよくなってみよっか。ねえ、これ、なんだか分かる？」

首筋の左右に、ぴとりと小さな物が当てられる。親指の腹と同じくらいの大きさで、弾力があり……軽く押しつけられれば、内側に穴のある指輪のようなものであると察しがついた。

先ほど、シャロンが革袋から取り出していた品の一つにそういったモノがあったのをアレクはまだ覚えていた。毒々しい紫と不気味な文様で彩られた、二つで一セットのリングだ。

「これは、首輪……だけど、ただの『首』の輪じゃなくって……」

皮膚の表面で濡れ光る媚毒をすくい、リングがするすると胸元を目指して降りていく。

シャロンが前傾姿勢を取ると胸肉のクッションは彼を窒息させんばかりに柔らかく密着し、幸福感で思考を蹂躪してくる。

その道具の使い道にも、シャロンの意味深な説明もまるで理解できないまま。その首輪は彼の体に掛けられる。

「胸にある首……乳首用の、輪っかだよ♪」

「っ、うむううっ!？」

穴の上部に膜を張るほどたっぷりの媚薬を湛え、二つのリングが固く突き出した乳首を捕らえた。一、二度だけ収縮してアレクの体に合わせ、やがて手を離しても決して外れないように全体で締め上げる。その圧迫はややくきつく、乳首を媚薬溜まりへ沈めていくこともあって電流のような痺れる快楽を与え続けている。

中心部にある穴へシャロンの爪先が滑り込み、乳頭の先端を、こりっ、と軽やかに引っかく。この十数分で最も大きく甲高い嬌声が、たぶたぶの下乳を押し上げるようにして発せられた。

「着けている人の体の動きを感じて、締め付けたりぶるぶる震える乳首リング……これ自体がすっごく意地悪な心を持ってて、状況に応じて一番「きつく」なるように調節す

る……んだって。ご主人様が言ってたよお」

改めて説明してもらおう必要などなく、彼は味わっていた。今や剥き出しの性感帯と化したそこへ加えられる、人の手では不可能なほど微少な振動。ほんの一秒ほどでも背筋を跳ねさせてしまうそれが、装着された瞬間からずっと続いている。

体を右へ左へ傾ければ傾けた方向からの振動が強くなる。体を反り返らせようとすれば強く震え、快感を堪え難い姿勢であるのを良いことに思い切り嫩る。胸を引っ込めれば弱い圧迫と強い振動をランダムに与えて意地悪くいたぶる。アレクが初めて味わった乳首からの快楽は、どんなに性技に練達した女性が行うよりも残酷でおぞましい、淫魔の道具によるもの。

両胸は、すぐに上半身全体へと快楽を広げる急所に変えられてしまった。頭の上から足先まで、もう気持ちよくなれていない場所が無い。……ずっと放って置かれている、凶悪に勃起しきったペニスを除いて。

「お葉がもっと体に馴染んだら、このリングだけでいくらでも愉しめるようになるよ……私もそうなったもん。男の人だからって遠慮しないで、お胸でイこ？」

「おぐう……うううっ……！」

乳頭にかりかりと爪が立てられると、そこに穴が開いて急速に媚液が流れ込んでくるような錯覚が襲い来る。焦らし漬けの快楽に溺れさせようと、シャロンは柔乳の先端をあからさまにアレクの口元へ押しつけてる。赤子が受ける授乳のような、そこまで情けない姿は晒すまいと首だけは振り乱し、彼はやつとのことで温かな乳獄を払った。

だが、そのタイミングは少々悪かったと言わざるを得ない。やつと開けた視界の向こうで、リリーナが不穏な器具を手にした瞬間を目にしてしまったのだ。

細いガラスの筒とㄇ字の持ち手、その先端には真っ赤な肉片のようなモノ……タコの吸盤に似た物体が付属している。一見すれば医療器具のようだが、その使い道は淫らな調教以外に無いだろう。

「これ……い、いれるね？ アレクう、いれちゃうよ？」

「……………ッ」

それが具体的には何なのか口で問うよりも早く、アレクは自分で理解してしまった。

見覚えのあるその形状は“注射器”。中に入っているのは、全身にたっぷり塗込まれて味わわされた媚薬だ。体内に注入するのだとすれば、その位置は、性器以外のどこだというのか。

「やっ……やめっ、んぐう!!」

「それもねえ、すっごいんだよ? 女の子の場合だと、自分の体と体が擦れたり、ビクビクしたりするだけで即イキしちゃうえっちな体に早変わり。独りで勝手にイきまくって、ご主人様に笑われちゃうの……恥ずかしいけど、気持ちよかったなあ……」

必死の抵抗は、しかし先程と変わらずむちむちの爆乳と甘いフェロモンによって潰される。全身は忌避感を露わにしていたが、刺激を一切与えられてこなかったベニスだけは期待していた。待ち望んだ快楽が、自分の知らない未知のモノであることに。

吸盤が押し当てられた先は、破裂しそうなほど膨らんだ陰囊の中心部だ。裏筋の延長線上に狙いを定め、ちゅぽん、と淫らなようにいて軽い音を立てて吸いついた。

そして次の瞬間、アレクは睾丸の容積が倍ほどにも増したような圧迫感に打ちのめされる。自分自身の体が窮屈で仕方なくなる。陰囊を風船のように膨らまされ、痛みを覚えてもおかしくないはずなのに、その感覚信号は脳まで到達する過程で不可解な快楽に置き換わってるのだ。

「おっ……おお……っ」

下着からはみ出したシャロンの下乳が唇にまで擦れてくる中、アレクは遂に理性を感

じさせない嬌声を上げさせられてしまった。

金玉が焼け付いて、焦げて、それからとろけてしまいそうだ——精子の一粒一粒が放出を求めて跳ね回り、体内から性感帯を挟っているのが分かる。リリーナの指が一ミリ進むごとに、サキュバスの淫毒が皮膚の微かな隙間をこじ開けてとろりとろりと流し入れられる。その悦びは筆舌に尽くし難かった。

体の表面で起きている異常も同時に反応しているのか、正気が削れるほどのむず痒さともどかしさを発する。——射精したい。いや、もう精液である必要すら無い。溜まったモノを、溜められてしまったモノを思いっきり放出したい。

「ねえ、もういいでしょ？ アレクさん一杯頑張ったじゃん。どうせいつか堕ちちゃうんだから……早く諦めちゃった方がきつとお得だよ？ ご主人様の下僕に、私たちと同じようになろうよ……」

淫猥な地獄へ向かって、もう一步、陥れようとするシャロンの言葉。だがそれが逆に、アレクの道徳の部分に火をつけた。

きつ、と唇を噛んで前からも後ろからも顔を背ける。間近でゆらゆらと揺らされ、よだれが垂れるほどの脱力を促してくる乳房の誘惑からも、何とか逃れた。ただただ黙り

込む。口を開けば喘ぎ声しか出てこない状態で彼が唯一出来る、それは涙ぐましい拒絶だった。

頑強さを武器としてきた冒険者の男が、叱られた子供のように震えて黙っている。哀れな様子は、心まで淫魔の端くれとなった二人の目には愛らしくて堪らない物に映った。美食を前にした時のように喉が鳴る。

押し当てられた時と同様の粘着音を上げ、空になった吸盤注射器が引き離される。陰囊の中心部分には真円状の不気味なキスマークが付き、サキュバスが扱う淫紋と似通った彩りで彼の名誉を汚していた。

媚薬全てが直で睾丸に注入された訳ではないが、袋の張り詰め方は異常だった。皺など全く無く、指で押してもへこまず、そのままペニス全体が圧力に引っ張られるほどの具合である。足の付け根を焦れつつ揉みしだくりリーナの手、その握り拳よりも大きいと言えは異常さが伝わるだろうか。

重たすぎて千切れ落ちてしまいそうな袋の中を、粘度のある液体が渦巻く。敏感すぎるあまり空気の流れすら感じ取れてしまい、全体が溶けて消えてしまったかの如くたぎる欲情をもたらす。

——自分たちの身体をあくまで補助道具に、淫具の力に頼る卑怯な方法を選んだ誘惑。しかし残酷な肉悦はとうとうアレクを追いつめ、残すは最後の「一カ所」を残すのみとなっていた。

その「一カ所」が、腹筋に当たりそうなほど反り返って半透明な白濁を垂れ流す。体格に見合って立派な剛直は、もはや人間の体とは思えない醜悪な赤黒さに染まりつつあった。

「じゃあ……最後。仕上げ、しちやおつか」

「……！ し、しあげっ！ わたし、わたしやるっ」

「うふふ……いいよ、お願いねりリーナちゃん。ねーアレクさん、今アレクさんのタマタマの中にはね、媚薬混じりの精液が満タンに詰まってるんだよ。それがもし、普通の射精をするだけでも気持ちいい通り道を過ぎちゃったら……どうなっちゃうかなあ？」

そう言われて初めて、アレクは自分が置かれている状況の真の恐ろしさに気がついた。……駄目だ。絶対に射精しては駄目だ。もし耐えられなかったら、今以上に恐ろしい、身の毛のよだつような悦楽を与え続けられてしまう。

「きつと、ゼリーみたいな精子が、ねちねちってちよつと進むだけで何回も深あくイッ

ちやうようになるよ……おちんちん大きくして、我慢のお汁をぴゅって出すだけで幸せになれるの」

それもまた、彼女たちが主人によって身を持って味わわされた責め苦なのだろう。知っていなければそうは言えないであろう口振りだ。

細胞の一つさえ残さず快楽の受容器へと作り替える、極悪な淫行。その末路を避けたければアレクは射精を堪えるほかない。せめて媚薬混じりの精液が排出されるのだけは避ければ、最も敏感な内側の感度だけは開発されずに済む。

……しかし、どうやって？ リリーナのしつこい吐息だけで先走りを漏らしてしまう、臨界状態の性器で。淫具と、人間よりも肉感的かつ妖艶な肢体を武器とする彼女らの。いつまで耐えればいいのか分からない、終わりのない責めを。どうやって。

「や、やめろ……頼む……！ やめてくれ……！」

何度も吐いてきた台詞だが、込められた感情は少し違っている。先程までは彼女らの身を案じ、正氣に戻るよう願う気持ちがあった。今は、単に自分の身を守るため。抵抗を示すべく閉じていた口を開けて、二人に上擦った懇願をしている。

とはいえ細かな感情の機微など、アレクの比ではないほど淫魔の快楽に心奪われてし

まった二人は気にも留めなかった。シャロンから情熱的に抱きしめられ、アレクはまた鼻も口もかぐわしい淫臭に沈められてしまう。

耳にこびりつくような粘音を立て、無防備に屹立する肉槍の中腹に親指と人差し指が巻き付いた。ペニスの径は、リリーナが目一杯に指を広げても囲い切れないほどだ。ねちやりと触れてきた手のひらも、その太幹全体からすれば大した面積ではない。だが、待ちに待った刺激であるというだけで、アレクの腰は歓喜に跳ね上がってしまった。

それだけでも気持ちいいものを、もう一方の手が反対方向から絡みついてきてサオを包む肉筒を作る。男が最も喜ぶ動作は、ペニス全体を温かく包み込んでから行われる出し挿れ。その感触を想像しながら両手の間に肉竿を収めているだけで、期待が忌避感を上回ってしまう。

我慢してのける心積もりはあるはずだが、今にも身震いと共に暴発してしまいそうな様では、もう。

「イけ……出しちゃえ、アレク……」

火照った声で宣告された後、達してしまつたら全てが終わりがかねない絶望的な手淫が始まった。

既に平常時の何倍にも敏感に、かつ大きく長くさせられてしまった竿を、淫ら極まらない細指が何度も滑る。出っ張った箇所にも溝になっていて箇所にも例外なく密着しながら、摩擦を失わせる媚薬粘液の助けを借りて扱き抜く。

調教のあまり知性さえ欠けてしまう有様だというのに、リリーナの手つきはこの上なく熟達した物だった。ただいたずらに強い刺激でアレクを壊したりなどしない。過剰なほど鋭敏な亀頭粘膜は優しく握り、くびれた部分できゅつと指の輪を締めて射精感を膨らませる。竿の部分は一定のリズムを守り、限界に向けてずっと高まり続けるように粘つく掌で抱きすくめる。

「お……っ……あ、あ、ああ……！」

結果として、アレクは快楽に溺れて失神するのも許されず、無慈悲なほど鮮明に性戯を楽しまされる。快感が強すぎて何が起きているのか分からない……ということが無く、彼女の指の柔らかさから、ぬるぬるの擦れ合いが生み出す心地よい熱、自分のモノがいかに跳ね回って悦んでいるのかまで理解させられるのだ。

手淫に合わせ、頭を挟み込んだ豊かな両乳も右へ左へ弄ぶように頬へ打ち付けられる。たぱん、たぱん、と触れてくる重たい感触はまさに性行そのものに似て、本能の部分を

否応なしに揺さぶる。

二人がかりで与えられる、自分の肉欲に従いつつも淫魔の本能がもたらすテクニクを交えた愛撫。魔族として未熟な部分を媚薬と淫具に後押しされ、それはもはやこの世に存在するどんな男も耐えられない極上の求精行為と化していた。

——こみ上げてくる射精感にアレクは驚く。嘘だ、と口に出してしまいそうにすらなる。

もうイく。耐えられるかどうか、我慢が利くか否かという段階を跳ばして精液がもう間近まで来ている。尿道全体を媚薬成分で満たしながら、鈴口をかき分けて迸るその寸前まで。

「大丈夫だよ、力抜いて……。これから何回も、何十回も、何百回も、出させてあげるんだから……。最初の一回くらい、早く出しちゃってもいいんだよ」

「はあ……はあ……出してっ、せーし、せーしほしい……。はやくっ、だせっ、だせっ♪」

「ね……？ 魔族の奴隷……精液奴隷になるの、幸せだよ？ もう我慢なんてやめて、壊れちゃお……私たち、みたいに」

全身を快楽で浸され、性的な刺激に対して弱く弱くさせられ続けていた体は、いとも簡単に絶頂へと登り詰めさせられた。気の遠くなるような悦楽が滴り、遂に溢れ出す。

「んっ……！　うぐううっ……！」

どぶん。最初の一回の脈動は、力加減を忘れてしまったかのように重たく白濁の頭を覗かせる。

どぼお……ずちゅ……にゅぢっ。それを容赦なく搾り出す手淫に乱されながら、瞬時に亀頭をも超える敏感さに加工された輸精管をこつてりとした精液が突き抜けてくる。体内の細かな弁や筋肉にすらへばりつき、何十回分もの射精を凝縮し、更にはその時間を長く伸ばしたような快楽をもたらしながら――。

「あっ……あはっ、あああ……あうああ……」

人の身から漏れたとは到底思えないザーメンを、リリーナが手と腕で受け止める。その手は動かし続けながら尻尾が腰の辺りから忍び寄ってくると、すぐさま精液を肌からこし取っては喜ばしげにのたうつ。

濃厚な精に興奮を隠せずにいるのはシャロンも同じだ。息さえ詰まらせてしまいそうなアレクを胸元の双丘でますます強く抱きしめる。押し潰され、まわりついてくる乳

肉に深く沈んでいくかのような倒錯感が絶頂をより鈍く引き延ばす。

「うふふふ……はい、出しちゃったね。十秒くらいは保ったかなあ……まあご主人様相手なら、一撫ででイカされちゃっただろうけどね」

言葉によっても事実を突きつけられ、まさしく心のタガを外される感覚に頭がぐらぐらと揺れる。

どれだけ意識が遠ざかっててもサオをねちっこく搾り上げる指の感触だけは異様に鮮明で、ポンプのように精液を送り出す動きが止められない。収縮の一回ごとにペニスがどろどろに溶け、リリーナの手に固められて、また溶かされる感覚が走る。かくかくと前後する腰も自分の物でなくなってしまったかのようなのだ。

「おっ、ご、お……うっ……!? うあああ………」

やっとのことで射精の終わりを示す冷めた意識が芽生える。だがそれも、精に飢えたリリーナは許そうとしなかった。彼女の片手が破裂しそうに膨らんだ陰囊へびたりと添えられたのである。

たった一度、それも軽く指を曲げる程度の力加減で、にぎ、と。排出を促されただけで、腫れ上がった睪丸は絶頂感を再び生み出しながら精液の塊を送り出した。媚薬の成



分がしっかりと染み終えた後の尿道を、それはぞりぞりとなぞり上げながら先端へ向かい、やがてごぼりと泡を作るようにして吐き捨てられる。

アレクはいつまでも続くオーガズムと、そうなってしまいうまでに道を踏み外してしまった絶望で震える。おぞましい魔族と化した過去の仲間に糧を与えてしまった事実が少し遅れて心へ刺さった。幸せ一色に染まりかけていた内心に痛みが走り……一瞬、悲しげに唇を噛んでしまう。

「……アレクさん。何でそんな顔してるの……？」

真上からそう問いかけられるが、陰囊に繰り返し与えられる圧迫で精を吸われ続け、返事など出来ない。もうどこをどう扱かれても、開ききった鈴口から一繋ぎになった白濁液をひり出してしまいう始末だ。

「……………ふーん。そっか。まだ頑張るんだ……そんなに私たちだけの奴隷になるのが嫌なんだ……」

それを心から望む人間の方が少数だと、大半の人間は考えるだろう。だが魔族と、その端くれになった彼女は別だ。彼女らにとって人を墮落へと誘う行為は、悪意の中に善意をも含む物なのだ。

名残惜しさを煽るように、下乳を両手で掬ってアレクから取り上げるシャロン。どこか不機嫌そうに筋張った尻尾が伸び、アレクではなくリリーナの両手へと枷の如く絡みついた。溺れるほど子種を浴び、尻尾からも口からもそれを味わっていた彼女を静かに引き剥がす。

「うあ……もつとつ……もつと欲しいよお……」

「もうお腹一杯でしょ？ 今日はこちらまでだよ、リリーナちゃん。……決めた。アレクさんには、前にリリーナちゃんを壊しちゃったいっちゃんきついお仕置き……受けてもらうね」

意識朦朧としていても、今までで最も不穏な宣言はアレクの耳に届いた。まだ不満げにアレクの股間へ熱視線を送っていたリリーナも、目を見開いたきり黙り込む。いきなり正気を取り戻したような姿にも見えた。

まだ完全な勃起を保ったままの陰茎から白濁が滴る。拘束台の形からおもむろに分離し、蠢きだした粘液塊がそれを受け止めた。青色の中に白が滲んで混ざる。

「どうしても言うことを聞かない子にだけするようにってご主人様から教わったの……リリーナちゃんは、あの魔法書をどうしても離さなかったからって、それされちゃって。」

ね、きつかったよね？」

「いや……う、ん……あれは、もういや……です……」

「……リリーナちゃんは怖がらなくていいんだよ。今からちよつと辛い思いをするのは、アレクさんなんだから」

粘液の罫がまたも形を変えていく。分離した塊も色味を薄くする代わりに体積を増し、一抱えほどの大きさにまで膨んだ。

体勢をわざわざ変えてまで何をする気なのかと、アレクが息絶え絶えに身構えたその時……シャロンはにつこりと笑って、踵を返そうとしていた。

「半日だけ……私たち、席を外してるね。それまでは一人でお留守番しててね、アレクさん♪」

……問い返すことも許さず歩いていく二人と、その背中に見える翼や尾を憎々しげに睨みつつ。アレクはほんの僅かに強がりを取り戻していた。

独りにしてもらえないのは願ってもない話だ。いくらでも休憩でき、策も練られる。

“独りきり” そのものが真正銘の地獄であると理解させられたのは、十二時間の内、まだ一時間と経たない時点での出来事だ。半日どころかもう一分と待てない、そう思わ

朱に交われれば朱に淫れる

せるほどの
“放置責め”
が彼の前に待ち受けている。

ウ
イ
ツ
チ
サ
キ
ユ
バ
ス

ウィッチサキュバス

危険度…B

出現場所…森・都市・町等

知能…普通～高い
特殊能力…魔術

ウィッチサキュバスとは、本来人間を誘惑し墮落させることを悦びとする淫魔種の中にあつて、魔術の神髄を極めることを至上の命題とする異端者たちの総称である。

人間と同等以上の知性を有し、生まれながらその身に魔力を孕む淫魔は言うまでもなく高い魔術の素養を持つのだが……持ち前の奔放さ、自由を好む気性故に魔術を研究しようとするものは然程多くない。

だが、人間の中に学者や研究者がいるように淫魔の中にもそういった真理の探究を好む者はおり、それらがウィッチサキュバスと呼ばれているのである。

つまり彼女たちと通常の淫魔を区別する種族としての差異、厳密な定義は存在しない。強いて傾向を挙げるとするなら、魔術の研究が盛んな都市に潜伏し、人間社会に溶け込む為、敢えて持ち前の妖艶な色香を抑えて慎ましく暮らす者が多い。だが、それを理由

に彼女たちを淫魔の中でも安全な存在と判ずるのは軽率と言える。

ウィッチサキュバスが人間社会に紛れているのも表立って人を誘惑しないのも、単に「そのほうが研究を妨げる面倒が少ない」という、実益を優先した結果に過ぎない。

どれほど上辺を真似したところで、所詮は生まれながらの魔物なのだ。

人間の倫理観など持ち合わせない彼女たちは、己の障害を排除する為にどんな手段を用いることも厭わない。その上魔術の研鑽の為には、人間、魔物はおろか、同族や自身でさえも実験台とすることにいささかの躊躇もない。その偏執的なまでの好奇心や探求心の充足を阻んでしまった者は、それがどんな人物であれ組織であれウィッチサキュバスの伶俐狡猾な罠により破滅へ誘われ、精緻にして残酷な「研究成果」をその身で味わうことになるだろう。



魔法の篡奪者

文 藍 場 浜
挿絵 UN__DO



幻想世界魔物大全

登場人物紹介

アルド

バルツェン魔術学院に所属する魔術師。若くして魔法薬に精通する優秀な研究者ではあるが、内向的な学者肌で人付き合いは苦手。

憂鬱ながらも初めての講師の仕事を引き受けるが……

マリカ

アルドの初めての生徒。

可憐な見た目に似合わず知識の探求に貪欲的だが、その理由は乏しい魔力への劣等感だけでなく彼女の背負う暗い過去にあった。

ジル

アルドの幼馴染であり、パートナーである戦闘魔術師。

思慮深いアルドとは対照的な、気さくで外交的

シスターサキュバス

シスターサキュバス

危険度…C

出現場所…町・村

知能…高い

特殊能力…様々

奸智に長けたサキュバスは時に人の姿に擬し、社会に溶け込むことがある。人は誰しも目の前の人間が突如危険な虎になるとは考えない。だからこそ、娼婦や踊り子といった男を誘う職業に就けば、彼女らの淫らな目的を達成するのは容易い。大胆にも——あるいは狡猾にも——神に挑戦するかのように、そのしもべたるシスターの姿を借りるものをシスターサキュバスと呼ぶ。

悪徳の隠れ蓑として宗教が優れていることは、歴史を知る者であればだれもが肯うところであろう。この種のサキュバスもまた、花に擬態し獲物を狩るカマキリのように、清楚で可憐な姿におやかな色香で誘い悩める魂を籠絡するのである。

あなたが純潔なる魂の持ち主であるのなら、この神のしもべの姿を借りたふしだらな冒読者には特に注意を払うべきだろう。シスターサキュバスが狙うのは信仰心に篤く、

禁欲的な人間である。奔放な人間よりも高潔で善なる人間を墮落させることが彼女らにとって最大の悦びであり、なおかつ肉欲を遠ざけてきた人間というのは得てしてそれに耽溺しやすいものだからだ。

人は禁じられているものを魅力的に感じる生き物だ。道徳や規律があるからこそ、それを破ることに意味が生まれる。高さが無ければ落ちることができぬように、高邁なる魂が無ければ墮落はしようがない。

だが、堕ちることがいかに快楽であろうとも、あなたは抗い続けなければならない。規律や道徳によって踏みとどまろうとすることで、人間は人間でいられるのだから。



ふしだらなシスター

文 背戸山葵
挿絵 しぐにゃむ



幻想世界魔物大全

登場人物紹介

トマス

マイルズの教会に仕える、オールト教の若き司祭。
清貧と純潔を重んじる、禁欲的な純潔派で、特に厳格な考えを持つ、誠実で熱心な司祭。

シスター・セシリア

一か月前にマイルズの教会に身を置いた、遍歴の修道女。
胸も尻も大きく、肉感的な女性。
清純な相貌ながら清貧な修道服で隠し切れない肢体には、
好意以上の視線が向けられる。

大
淫
魔

大淫魔

危険度…S

出現場所…不明

知能…非常に高い

特殊能力…魅惑

人間に傑物の現れるように淫魔の中にも他と一線を画する個体が現れることがあるという。それが大淫魔である。

大淫魔は淫魔という種の中でも抜きんでて美しい存在である。己の醜さを恥じて月が隠れ、花が萎れるとさえ語られる圧倒的な美しさによって、魔眼や魔術による魅了や肉体的な快楽といった夜の血族の常套手段を用いずとも、あらゆるものを虜にしてみようだろう。挙措の一つ一つが、語る言葉が、声が、眼差しが、心を蕩かす甘美な毒なのである。

だが、光が己の眩さを制御できないのと同じように、大淫魔も自身の美を制御することは出来ない。望む、望まざるに関わらず、他者を魅惑してしまうのである。

それ故に大淫魔の周りには常に争いがつきまとう。周囲にいる者は全てを捧げ、あら

ゆる犠牲を払ってでも彼女を手に入れようと、あるいは彼女に取り入ろうとするからである。

しかし、どんな戦火や渦中の中にあつてさえ、大淫魔は決して死ぬことも傷つくこともない。溢れ出る魅力によって運命さえも従えてしまうのだから。

大淫魔は存在そのものがひとつの災厄だと言える。

ひとたび出現すれば町が滅び、都市が崩壊し、国が廃れる。

もしその身に邪悪な野心が芽生えれば、一つの時代が終焉を迎えることさえ起こりうる、それほどまでに危険な存在なのである。

だが、幸いにも大淫魔はいくつもの奇跡的な偶然が重ならねば、生まれること決してない。

この特異な淫魔が現れるとすれば、神が気まぐれを起こしたか、果て無き人の欲望が禁忌の境を踏み越えたか、そのどちらかであろう。



夜の国の美妃

文 背戸 山葵
挿絵 なぐるふある



幻想世界魔物大全

登場人物紹介

ジュネ

デリグナンの領主である魔族の男性。
人格のみならず戦士としても秀でた、高貴な血筋の持ち主。
姦計に落ち、虜囚となって王女の元に運ばれるが……

マノン

常夜の国ミニュイの王女。
死と血が蔓延し、混迷を極めるミニュイ王室の数少ない生存者。

ロザリー

ジュネの妻。
花のように美しい人間の女性。

ハ
ー
レ
ム

ハーレム

ハーレムとは後宮を意味し、転じて一人の男性と複数の女性との性的関係を指す。情欲を押さえきれず女体に大枚を積む男が咲き乱れる花に抵抗できるだろうか？ 残念ながら、淫魔は男性を誑かすもつとも有効な術を心得ている。

ぐしょ濡れの下着を脱ぎ捨て、豊満な裸体を惜しげなくさらした美女達が、あなたに目配せする。目を潤ませ熱い吐息を漏らし手を伸ばす。ひとたび手を取れば後は女達のなすがまま。乳房を押し当てられ暖かな女体に囲まれて、両耳に舌が這い唇は塞がれて、女達の海に揉まれてたちまち虜にさせられてしまうだろう。それが淫夢や幻術ならまだしも、最も恐れられる淫魔は、果てなき欲望を現実としてきた。

あの若々しい少女を手籠めにしたくはないか。貞淑な人妻の体を汚したくはないか。世界で一番美しい女に相応しいのはあなたしかいません、毒婦はそう囁いて墮落の淵に誘い込み、大家が、村が、国までもが滅んでいった。

何せ欲望には際限がない。めくるめく倒錯の世界も、やがては慣れて、更なる甘露に

喉は乾く。分相應な欲望はやがて破綻し、淫魔が溜飲を下すのだ。



ルシファー落ちる

文 トロスタニ
挿絵 セイヘキマスター



幻想世界魔物大全

登場人物紹介

ベス

田舎騎士オルヴァー家の騎士見習いの少年。
異例の大抜擢を受け、王子の盾持ちとなるべく太陽王都に上るが、そこには淫蕩な姦計が待ち構えていた。

レオ

太陽王国ソシレーヌムの第一王子。
王妃派によって混迷を極める太陽王国を正すため、贅の限りを尽くす王妃の晩餐会に踏み込むが……

カタリーナ

姿を見せない国王に代わり、女王を自称し権勢を牛耳る、絶世の美貌の第五王妃。

シャザー

第五王妃カタリーナお抱えの女隊商長。

ソフィア

陽光の白百合と称えられる、第一王妃エウリュディケの母。

エキドナ

月光の黒百合と畏れられる、娼婦ギルド長。

ヴィタエ

百花宮を取り仕切る、体も図も太い淫魔メイド長。

ミルド ヨーギ プラム コルト

百花宮で働く淫魔メイド。

企画・製作 白森書房 トロスタニ

本作品内の画像・テキスト等全てのデータに対して、無断転載・複製・改竄・第三者に譲渡することを固く禁じます。